

飛鳥京跡苑池遺構第3次調査(飛鳥京跡第145次調査)

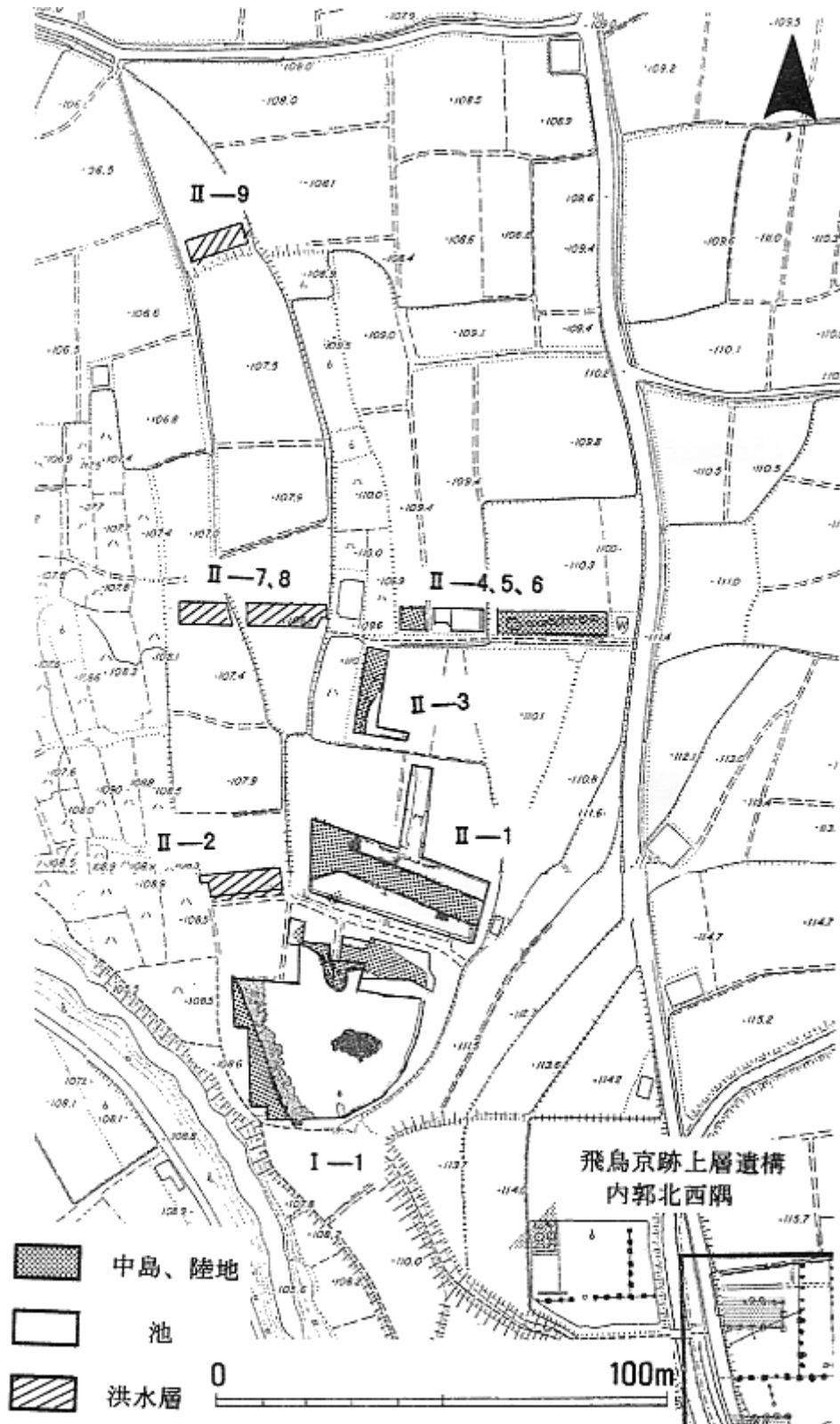
現地説明会資料(2001年7月7日)

1. はじめに

飛鳥京跡苑池遺構は、平成10年度から11年度にかけての第1次調査によって初めて確認された飛鳥京跡に付随する苑池です。第1次調査では苑池の南端付近を調査して、西側の石積み護岸と池底の敷石を確認しました。また池中では石造物2点と島状の石積み、南へ舌状に張り出す石積み護岸を確認しました。この石積み護岸の様子から、苑池は調査区外の北方に広がることが確実となりましたので、平成12年度に苑池の範囲と形態の確認を目的として第2次調査を行いました。その結果、池を南北に仕切る東西方向の渡堤を検出しました。そしてこの渡堤を境として池の様相が南北で異なることが判明しました。さらに渡堤から北に約60mのところまで池が溝状に狭くなり、北方に抜けている通水部を確認しました。この通水部からは木簡が約50点出土しており、この中には、苑池に関わる職名「嶋官」、薬園の存在を思わせる「委佐俤(わさび)」、天智天皇5年(西暦666年)にあたる「丙寅年」の記載があります。

今年度は渡堤の全容と中島との取り付き部分の解明を目的として、昨年度の第2次調査第1トレンチ(以下、Ⅱ—1トレンチと略称)で検出した渡堤の西側の延長部分を拡張する形で調査区(Ⅲ—1トレンチ)を設定しました。あわせて第1次調査で確認した張り出しの形態と渡堤との関係を解明することを目的として、張り出しの北側に調査区(Ⅲ—2トレンチ、Ⅲ—3トレンチ)を設けました。

調査に際しまして、土地所有者の岡寄正博様より格別のご理解とご協力をいただきました。また地元の明日香村教育委員会、岡区からも多大なご協力、ご援助をいただきました。記して感謝申し上げます。



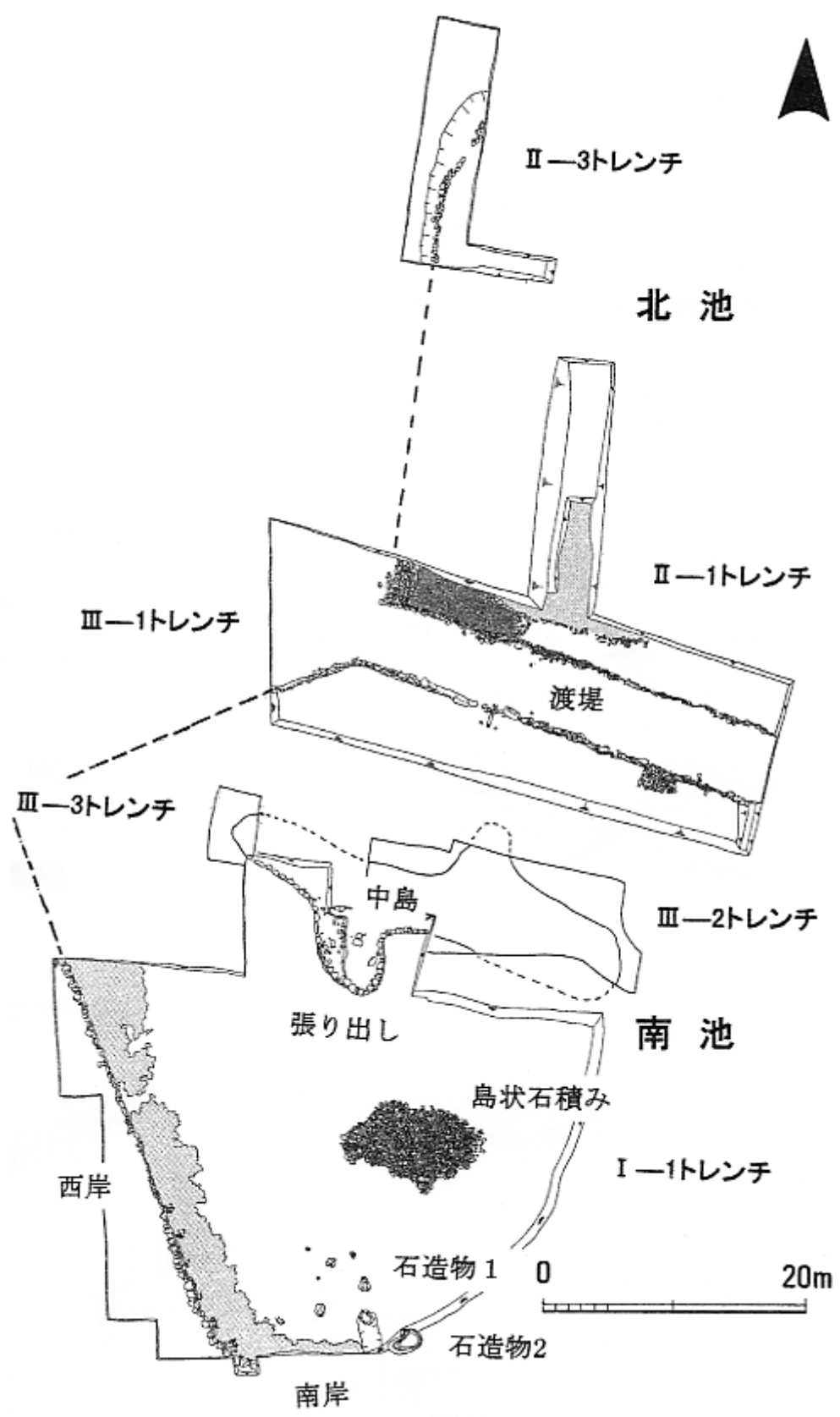
調査区の配置

1/1,000 飛鳥京跡 (1)、(2)

2. 調査の概要

渡堤 調査の結果、渡堤は直線でさらに12m西に続くことを確認しました。検出した長さは第2次調査と合わせて東西32mです。渡堤の護岸は、南北両辺で石積みが異なることが第2次調査で判明していましたが、あらたに確認した部分でも同様に南側の護岸が北側に比べて大きな

石を使っています。

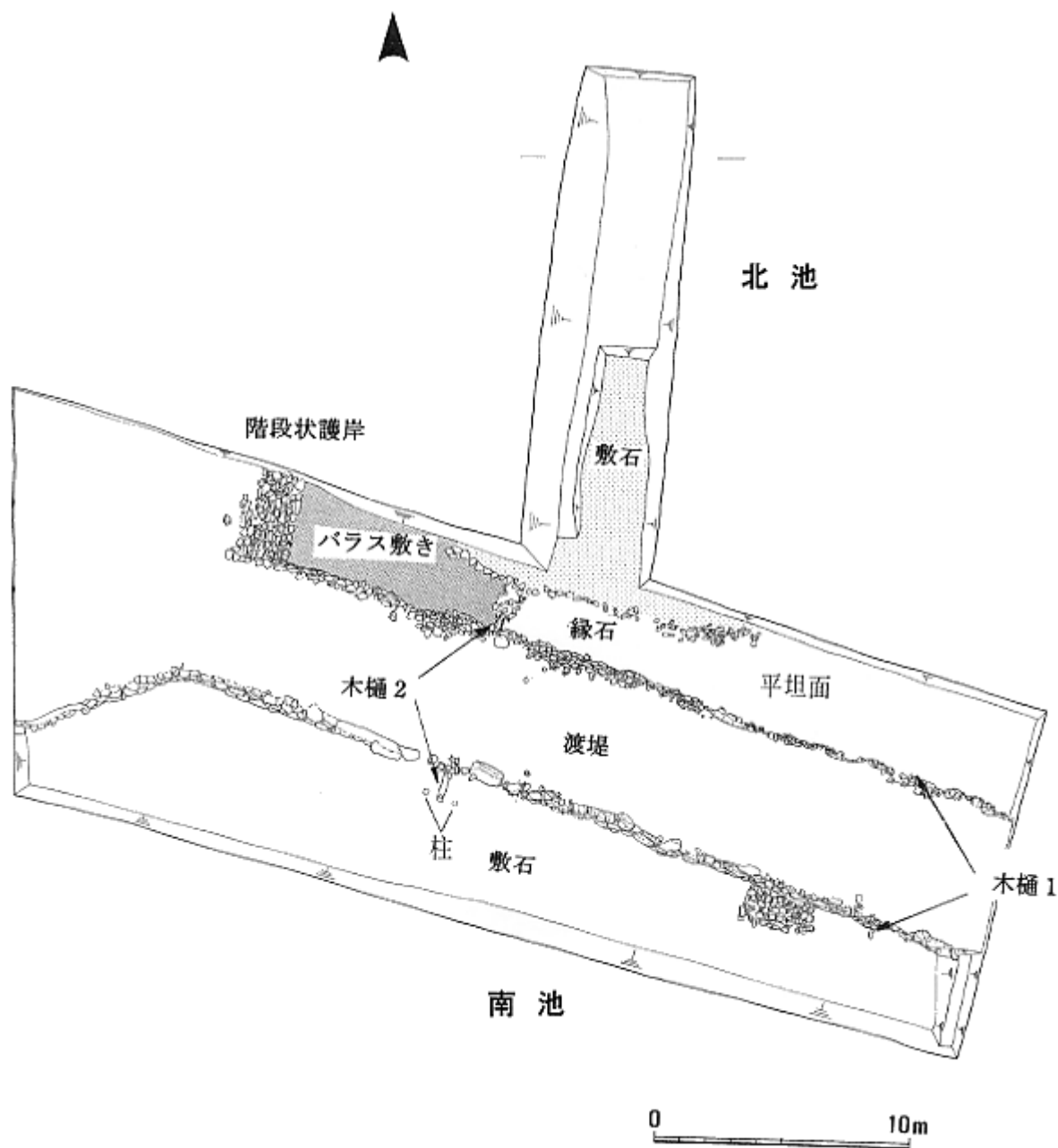


渡堤の位置関係

渡堤の北側護岸は西側の岸と直交方向に取り付き、II-3トレンチで検出した護岸と南北に

直線で結ばれます。護岸の高さは現状で1mあります。西岸の護岸は階段状に造られており、水際に下りられる構造になっています。長さ3m、高低差1mの5段分を確認しました。階段のステップの幅は30~50cmです。5段目以下は平坦面によって埋められています。なお西側の一段低い部分は洪水で攪乱されているため、この陸地が中島になるか否かは不明です。

渡堤北側の平坦面は、Ⅱ-1トレンチでは築造当初の木樋(木樋1)を埋めていたことから改修によるものと推定しましたが、今回の調査で平坦面上に新たに木樋(木樋2)を検出し、改修であることが裏付けられました。平坦面は護岸裾から幅2mの平坦面で、端には縁石を立て並べています。縁石列の東西両端は湾曲しており、北池の東西隅は丸くなっていたと思われます。平坦面の上面はⅡ-1トレンチでは土のままでしたが、木樋2から階段護岸までの8.5mの間はバラス敷きになっており、緩やかな傾斜がつけられています。



渡堤平面図

渡堤の南側護岸は東端より32mのところでは142°で屈曲してさらに西へ直線で7m以上続いています。護岸の用材や石積みは屈曲点を境として変わっていません。高さは現状で1.6mありません。池底には敷石が一面にみられ、水平に整えられています。

木樋2は木樋1から17m西側の位置で渡堤と直交方向に検出しました。北側は渡堤護岸裾から40cm、南側は110cm開口部が出ており、全長は7.5mあります。木樋は渡堤の上面から幅2.3mで溝状に掘り込んで設置されており、護岸には木樋設置後の積み直しが認められます。木樋の構造は丸太を半裁し中を削り抜いて凹形に整形したものを身とし、上に板状の蓋をかぶせたものです。身の外法は幅25cm、高さ推定25cm、内法は幅18cm、高さ13cmで、蓋の幅は25cm、厚みは6cmです。南側は遺存状況が良好で、取水口の構造がおおよそ判明しました。蓋には18×15cmの方形の孔が開けられ、その両側に径25cmの柱が2本、120cm間隔で立てられています。柱は高さ60cmまで遺存し上部は欠損していますが、横に部材を渡して栓をその中央から木樋の方形孔に下ろしたものと考えられます。木樋2は北側では改修後の平坦面上に設置されているため、南側では池底から40cmの高さでかさ上げをしています。木樋底の高さは、現状で北に向かってわずかに下がる勾配が付けられています。なお木樋周辺から斎串が26点出土しており、水の取排水に関わって祭祀行為が行われたとみられます。

中島当初、第1次調査で確認した張り出しは、池中の広大な島の一部と考えていたのですが、護岸の上面を部分的に確認したところ、南池の中の東西に長い島であることが判明しました。2箇所には張り出しを持ち、渡堤から南へ約15mの間隔をあけて造られています。東西長は約32m、南北幅は狭いところで4.5mです。上面の北側護岸際には松の根が6箇所遺存しています。

3. まとめ

今回の調査成果として次の3点があげられます。

1. 渡堤が全長32m以上の長大なものであることが判明しました。
2. 2南池の中で独立した中島を確認しました。東西に細長い形状で、第1次調査で検出した張り出しは中島の一部であることが判明しました。他にも1箇所に張り出しがあり、曲線で全体を構成しています。飛鳥時代の中島としては初めての検出です。渡堤に近接していることから中島に渡るための橋の存在が考えられます。
3. 改修時に伴う木樋をあらたに確認しました。石積みの様相から次の工程が想定されます。
①築堤→②木樋1設置→③護岸石積み→④敷石敷設(池完成)→⑤犬走り造成(改修)→⑥木樋2設置
4. スロープ状のバラス敷きの確認しました。苑池内ではⅡ—5トレンチに次いで2例目の検出です。意匠的には奈良時代の洲浜敷に通じると考えられます。また、苑池内では南池の池底では平らな石を敷き詰め、緩やかなスロープでは小石を敷き詰め、北池の傾斜部分では大きめの石を置いただけにしており、池底の形状に合わせた敷石の使い分けがみられます。